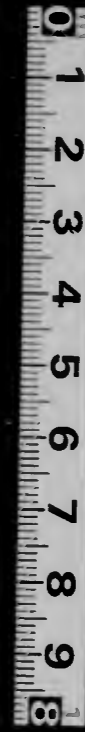


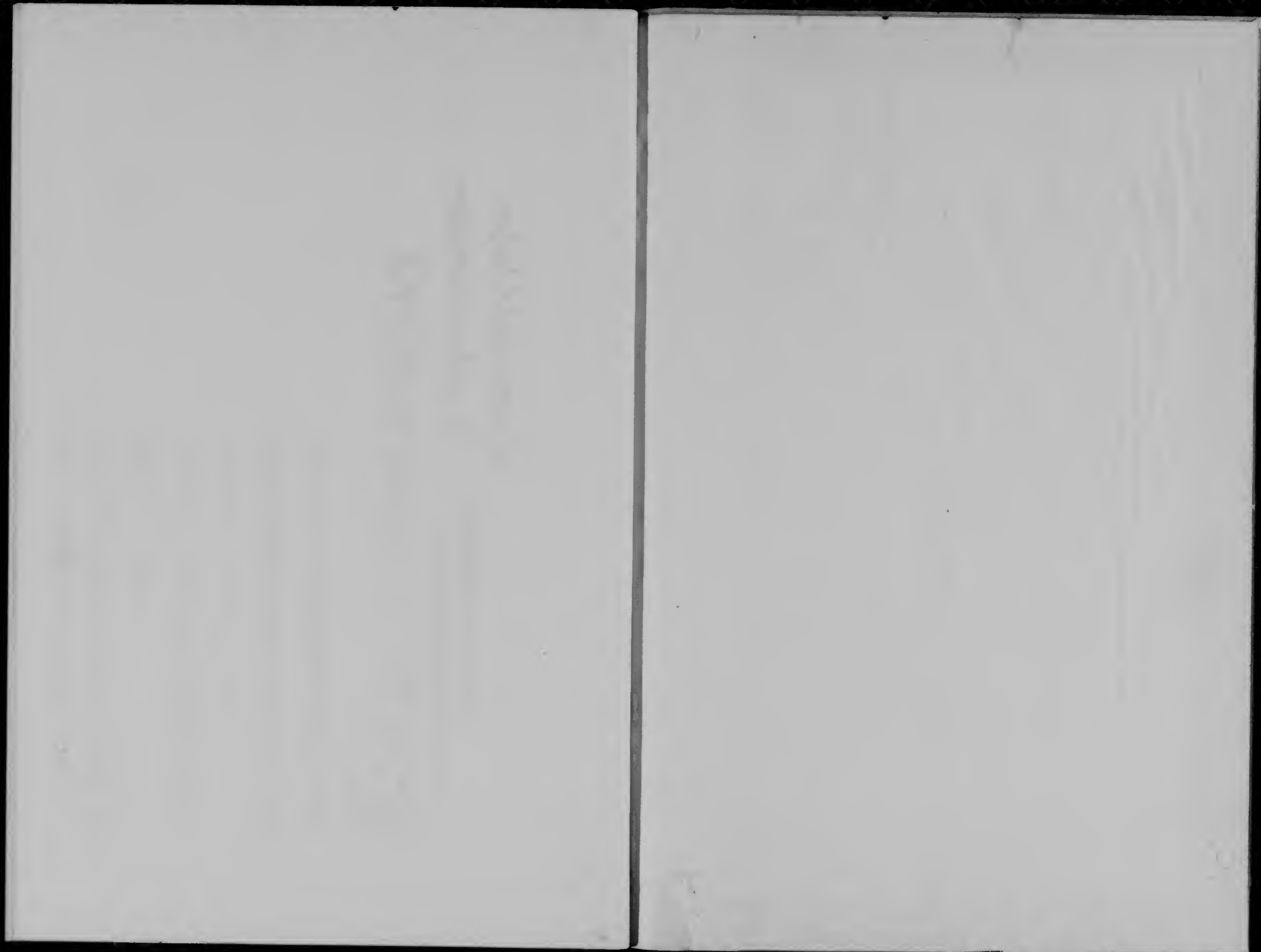
西丸御書院書之番

三



内閣文庫	
番號	和 32569
冊數	394 (187)
函號	152 121

庫文閣内	
五二函一四架	三二五九二冊
	和書類



元文二年三月廿三日

享保二年十月九日分紙

永井潛政守正元吉男

出雲守御前守正元吉男

御書院前守正元吉男 永井三平守正元吉男

故 伊織 権前守

同奉旨言渡射御後首之御書正之端

同奉秋渡城の御書正之御書正之端

同奉用御書正之御書正之端

元文二年三月廿八日又渡射御後首之御書正之端

御書正之端

元文二年三月廿八日又渡射御後首之御書正之端

同奉用御書正之御書正之端

元文四年三月十三日狩射御後有之明の
十日菅中にいささか美合と稱す
日年月廿六日狩射御後有之得物と稱す
寛保元年二月廿日又狩射御後有之
得物と稱す是より此事と云ふ
御後に入らば恩賜ありと云
寛保二年三月廿日狩射御後有之
明の十日菅中にいささか美合と稱す
延喜元年二月九日又此事有之明乃
十日菅中にいささか美合と稱す
寛延元年六月十日又此事有之と
命せし七月廿日御服美合と稱す

明の三年四月朔日御後有之御後

宝曆四年三月十一日御後有之

日年三月十八日御後有之と云ふ

宝曆六年六月廿日御後有之と
命せし八月十日御服美合と稱す

明の五年四月朔日御後有之御後

宝曆十年十月十日御後有之

宝曆十二年七月廿八日

文昭廟と稱すは心所御後有之
巡りし事有り

同年十月廿九日春連川左衛門尉と
少く致仕すは事と云ふは春連川

野にありて花押の院と見えありて
作有上り申す御暇美合殿と稱す十月
朔日御く御留す

同奉三月廿三日

文昭廟と稱す御用と稱す
美合殿と稱す

宝曆二年二月廿八日

百壽姫若冲宮東冲園と合を記す九月
晦日事と稱す御後と稱す

宝曆十二年十月廿五日

御霊公脇宮本宮と稱す御用と稱す
出本家と稱す御用と稱す御留九月

御暇美合殿御暇と稱す御用と稱す
御く御留す

明和元年二月廿三日東叡山

御宮と稱す御用と合を記す御用

十月廿三日事と稱す御用と合を記す御用

明和二年四月廿日小宮御留奉り

同奉三月廿日叙御留御用と合を記す御用

明和二年三月廿日西儀の御留奉り

御用と合を記す御用御留奉り

御用と合を記す御用

同奉四月廿日西儀の御留奉り

御用と合を記す御用

天明三五年二月八日御座奉行

同奉九月八日西條の明き御座乃ら

大奥の事と司りしこと言定に候

と殿以意次相作と傳りてきて時股

とと候

天明三五年九月八日奉七十五家

元文二三年三月廿三日

享保二十五年八月廿日御目

御書院書并備前守御

吉原 梅殿内記長兼
改益助

友助長院書

山本信祖丹波守在馬と云

同奉秋後城の御座乃ら

延享二五年秋 宝曆二五年秋又後城の

御座乃ら

宝曆二五年六月朔日御書院書御目

同奉九月八日御座乃ら

白紙候と傳りて日而志と云と云

宝曆二五年十月廿日御座乃ら

元文二年八月十日死享年九十一
明和元年八月十日死享年九十一

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

元文二年三月十日

享保十六年三月十日

河津院前并佐守總 七喜 久保權左衛門忠恭

任市忠時忠辰

山崎信總竹中周防守忠死

諸城小宮忠也 事九年八月十日

安永元年三月十日老稱揚美合二入為因為守忠死

安永九年八月十日致仕

同年三月十八日誓切了之梅翁云云

天明二年七月十日死享年九十一

元文二己年二月廿三日

寛保由己年四月十五日

平野九左衛門長春知成
中書院御前御守組 三音侯 平野右衛門長春

同平野秋澄侯の御守御前

寛保三己年三月十九日死 二十九歳

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

元文四年二月九日

西院中書院御書由御書院御書院御書院

御書院書院御書院 三書院 朝以宗書院御書院

後院御書院

寬保二年四月八日御書院 西院御書院

同年三月五日御書院 御書院

延享二年九月五日御書院 御書院

寬延二年七月七日御書院 御書院

三書院御書院

寶曆二年六月十日御書院 御書院

安永七年六月七日御書院 御書院

安永八年二月廿五日奇姫利て良宣と云
寛政二年二月廿日死公十二歳

元文四年二月廿九日

御書院苗清津山城守但 三景松平宮右衛門康敬

後三景

延享二年秋清津城の古名にありて
長く清津城の古名にありて

延享二年二月廿日海月古名にありて
返一奉る

宝曆九年二月廿日十二と之間名也
今もききとく美令と云

安永六年二月八日光祥佛堂に入牧野月也と云

同辛巳月廿日死七十五

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

寛保二巳年七月二日

享保十八巳年七月二日

御書院書院清津山塚守但

長門守義全清津山塚

小宮守但架清津山塚

千石守大清津山塚

改内務

延享元子年三月廿日葛西のちうじに

道遠志多のちうじに同六月廿日

ちうじに同六月廿日

延享二巳年九月廿日

事一と勢

宝曆元巳年三月廿日

宝曆二巳年四月廿日

徳川家康公

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

寛保二年七月三日

元文六年六月六日

御書院青沼津城守御 吾子侯石川忠之丞非仲

[Small vertical text, likely a signature or seal]

寛延元年七月七日

安永六年十月二日

寛保二年七月三日

寛保九年八月三日

百中後漢書

小菅信但下南

惟橋控九而能壽

同日誓の四百集と長く小の作有

路城の影を傷ひる事あり

延享四年七月廿日麻布谷河の郵敷宗を

安永六年七月廿日又后船船出か

天明四年七月廿日老得揚美令に入御積肥落

天明八年四月廿日致仕

同奉三月廿日誓と刺く印せ

寛保二年七月三日

寛保十二年三月廿七日

御書院南清漆出御

二宮依花井彦右衛門定延

彦右衛門定持書

小宮信純長春河冬帝上死

同日替一内百儀之記之足之世活不

延享二年三月廿七日

延享四年三月廿七日

寛保二年七月三日

元文元年十月二日

御書院青沼津山城守御

千石

松平庄左衛門忠輝

後 對馬守

庄左衛門忠全養子
山崎屋組竹中屋守より

延喜二年秋陸奥の事ありし

延喜四年十月十日の事ありし

去る所野村島十月十日の事ありし

時辰と云ふ

宝曆三年秋陸奥の難事ありし

時辰と云ふ

同年十月八日統一統の事ありし

如し後

宝曆六年十月十日御元日

日幸十月十日御元日御元日

宝曆十年二月御元日御元日

宝曆十二年六月十二日

大御所様御奉送の御用と令書

日幸十月十日御元日

有章殿と御書

新御殿と建つをり

御宝帳御造立御用と令書

日幸八月十日

信信殿御奉式御退福御用と令書

時服と御書

宝曆十二年六月九日御元日

信信殿御建御宝帳御造立の御用と

令書

日幸九月十日御元日

御宮御書と御書と御書と御書と

御書と御書と御書と御書と

御書と御書と御書と御書と

御書と御書と

宝曆十二年二月八日御元日

御宮御書と御書と御書と御書と

御書と御書と御書と御書と

御書と御書と御書と御書と

昭和元年二月廿三日又日光下事
中場ノ事先ノ終ル也其ノ格別ノ
官造ノ事ニシテ其ノ事ニシテ
其ノ事ニシテ

昭和二年三月廿日去一廿日ノ奉書申
奉昭和四年四月廿日

御神志法會方部ノ御用ノ令ニシテ
上日日光ノ御書申造ニ申シテ
御書申七月廿日又日光ノ
官造ニシテ其ノ御書ノ切シ
御書申ニシテ其ノ御書ノ切シ
其ノ御書ノ切シ

昭和二年四月廿日
御書申ニシテ其ノ御書ノ切シ

昭和二年四月廿日
御書申ニシテ其ノ御書ノ切シ

御神志法會ノ御用ノ令ニシテ
又申シテ其ノ御書ノ切シ
其ノ御書ノ切シ

昭和二年四月廿日
御書申ニシテ其ノ御書ノ切シ

徳用替りしつて時服にと給ふ

同奉之月三日末極宮の昨

壽宮宮園東よりしつてつと徳用と替りし
るまき作有し

同奉之月十五日徳用と替りしつてつと

つと時服にと給ふ

明和五年三月九日徳用と替りしつて

つと時服にと給ふ

同奉之月廿八日

壽宮宮園東よりしつてつと徳用と替りし

つと時服にと給ふ

明和六年三月廿九日西條の末より

徳用と替りしつて徳用と合ふしつて

明和五年三月廿九日徳用と替りしつて

同奉之月十八日叙尊内廷作対馬守と改

明和八年八月廿日

徳用と替りしつて徳用と合ふしつて存高日

徳用と替りしつて徳用と合ふしつて

同奉之月廿九日徳用と替りしつて

徳用と替りしつて時服にと給ふ

同奉之月廿九日徳用と替りしつて

徳信親王十三回の徳用と替りしつて

同奉之月廿九日徳用と替りしつて

同奉之月廿九日徳用と替りしつて

安永三年三月廿一日

天明四年三月廿一日
佐野菅原の故言狂夜記にて田沼勘守
意知と又傷と一時忠卿を名ぬ言と
いふは田沼に似ていふは柳生を指す人通
事りて挿入して事とす

天明四年三月廿一日
此日の働きと辛みのを掛け感一思ふ乃
作と之世と和る天明初長作とて沖寛
二百九十三名

同月七月晦日
上列新田部少くす

天明六年三月廿一日
おろし少くをた令或者多と賞はる

天明七年八月八日
同日是との如く勢の内三を名とす
の作とある

同月三月廿一日
寛政元年三月廿一日

寛保二年 辛七月三日

寛保元年 辛四月三日 奉旨

御書院 青沼深田 権守組

右 右 柳永内 色有秀

権守組の秀豊 忠次

忠次 権守組の忠次 忠次

延享二年 辛秋 深田の忠次 忠次

宝暦二年 辛八月三日 移入 御田河守 忠次 忠次

明和二年 辛四月三日 移入 御田河守 忠次 忠次

安永二年 辛三月三日 死 忠次 忠次

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

寛保二年七月三日

寛保元年三月十日

御書院南清澤山城守道

若

松平由富恒隆

田宮幸隆

小笠原恒祖北条新藤左衛門

寛保二年十月八日大崎町村清後村に
列て時服に参る

延享二年四月廿五日南郷村に参りて
時服に参りて
延享四年三月廿五日大崎町村に参りて
時服に参る

寛保元年四月廿五日南郷村に参りて

時辰三時三十分菅中へきて美念は揚る
宝曆元年二月三日三時三十分下道遠志
少少打鴨村後日三時三十分菅中へきて時辰
三時三十分

宝曆二年二月三日智松平内膳親房流
罪ふ度きれぬ伺の上進認らましく
宿志とをまきし種をくろきまき

宝曆六年二月三日清ら揚始の村に列して
時辰三時三十分菅中へきて美念は揚る
宝曆六年二月三日清ら揚始の村に列して
時辰三時三十分菅中へきて美念は揚る
同年四月七日西條の山里にて百日的湯後有り

も列して入る勢の同八百西條の山里にて美念は揚る
宝曆七年二月三日清ら揚始の村に列して
時辰三時三十分菅中へきて美念は揚る
宝曆九年二月三日清ら揚始の村に列して
時辰三時三十分菅中へきて美念は揚る
同年二月十日菅中へきて美念は揚る
かり事しとて美念は揚る

宝曆十年二月三日清ら揚始の村に列して
時辰三時三十分菅中へきて美念は揚る
同年二月七日大雨清ら揚始の村に列して時辰
三時三十分
宝曆十二年四月三日清ら揚始の村に列して

時辰三時 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
同辛酉月廿七日 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
宝曆二年 辛酉月廿七日 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
時辰三時 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
宝曆三年 辛酉月廿七日 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
時辰三時 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
明和元年 辛酉月廿七日 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
時辰三時 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
同辛酉月廿七日 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
明和二年 辛酉月廿七日 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
明和三年 辛酉月廿七日 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ

時辰三時 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
同辛酉月廿七日 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
日記 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
明和三年 辛酉月廿七日 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
時辰三時 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
明和四年 辛酉月廿七日 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
時辰三時 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
同辛酉月廿七日 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
時辰三時 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
明和五年 辛酉月廿七日 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
時辰三時 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
同辛酉月廿七日 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
時辰三時 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
同辛酉月廿七日 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ
同辛酉月廿七日 卯の十日 菅中へきて 美奈村と云ふ

時辰ニシテ

明和六五年四月五日清ら湯治の村に列して
時辰ニシテ清ら湯の三日官軍に交り美奈村に清ら

明和七五年四月五日清ら湯治の村に列して
時辰ニシテ清ら湯の三日官軍に交り美奈村に清ら

明和八年四月五日清ら湯治の村に列して
時辰ニシテ清ら湯の三日官軍に交り美奈村に清ら
二ニ揚る

明和八年四月五日中人隊

同年四月五日日光湯治と令をさす

同年三月十八日布衣と令をさす

安永六年四月五日日光湯治と令をさす

壬辰年四月五日日光湯治と令をさす

清ら湯の三日官軍に交り美奈村に清ら

安永七年四月五日日光湯治と令をさす

天明元年七月五日日光湯治と令をさす

天明四年四月七日日光湯治と令をさす

天明五年三月五日日光湯治と令をさす

天明六年四月五日日光湯治と令をさす

天明七年四月五日日光湯治と令をさす

天明八年四月五日日光湯治と令をさす

天明九年四月五日日光湯治と令をさす

天明十年四月五日日光湯治と令をさす

天明十一年四月五日日光湯治と令をさす

天明六年三月晦末幸路沙紀の
出仕とある。

天明七年四月朔日幸路の如くに
出て浮揚し

同年四月廿三日お高の月並出仕乃
事とある。

天明七年七月十九日死去七歳

寛保二年七月三日

寛保九年三月廿七日

御書院南浦津山城守組 三右衛門 上野七郎右衛門忠首

七郎右衛門 忠首係承組

中十郎 忠首係

小十郎 信組 永井 忠首

寛保二年三月廿三日 臨村後首と明の

正日首等は云々して其令とある。

同年十月廿日臨村後首と御物とある。

延享元年三月九日又云々事と後首と

明の十月廿日云々して其令とある。

同年十月晦日又云々事と後首と

延享二年秋後城の御書院とある。

瑞村の清用は是れ江戸府の止り。

寛延元年十月六日瑞村清用有る

同日五日當中八百七十七歳と云ふ

宝曆二年秋宝曆二年秋瑞村乃

瑞村の清用有る

明和二年七月廿五日死す

寛保二年七月三日

元文元年十月廿三日

河書院青清津山城守

二條山林山三郎

段彩

山林彩雲山恒清無所

山書院廻永井信長

同日彩雲の内百信と云ふの信有る

延享二年秋宝曆二年秋

宝曆二年秋明和六年秋

瑞村の彩雲有る

安永六年秋瑞村の彩雲有る

延享二年秋瑞村の彩雲有る

明和二年七月廿五日瑞村の彩雲有る

明和六年九月朔日
弟也八郎服白袷好
十月五日内之津陽
母津朝宮と
姉

安永二年八月廿日死

延享二年四月廿日

寶徳二年三月廿日

延享二年三月廿日
仁本寺

延享二年三月廿日

宝暦二年十月廿日

延享二五年四月四日

元享二申年三月三日

御書院書院津山城守總子喜右松浦緒在馬備

緒在馬喜右宗喜信總去官忠臣而之死

諸城の宿衛の事ニ及

宝曆十在年六月三日法園巡檢使と

合さし七月五日山國の事と巡入事

作と兼り八月五日法服兼令好時殿ニ

加職と爲り巡視の道より宿の事と

明の二月御りされし浮揚せられた

宝曆十在年七月五日死ニ事六果木

延喜二年四月四日

寛元元年九月二日

上皇而後福徳院

小菅信但内後上皇而後院

御書院番清津山城守領 十三日 青山七右衛門成存

後但馬守

同年初諸城の名をよみあり

寛元元年二月二日 多佐のまろ下道遠

志多小杉志時村長月九日 官中に言きて

時胎之と終る

寛元二年三月廿二日 大崎守村清後乃

村長に到て官中をよみ六時胎之と終る

宝曆二年九月 諸城をよみて終る

宝曆六年九月廿二日松平又三郎初め六
彼願國薩列鹿野浦に國司有之て其の
作者之明の五年三月朔日服美合と爲り
国司有之由く洋傳す

宝曆九年三月十日とも同宿上上乃
勢向もいさく美合と爲り

宝曆十年正月十日河使番

同年二月廿三日法圓巡檢使と令す
七月廿九日のちと巡りし作と爲り

同年七月廿八日初と爲り

宝曆十二年二月廿八日巡檢出服美合并
時服之相成と爲り三月朔日由く洋傳す

宝曆十二年三月十日河司

宝曆十二年東敵山

二河牌敵と爲りしと令す

宝曆十二年三月十日河使番

同年四月廿九日河司初め内東敵山の
官造の事も言有之と時服と爲り

宝曆十二年三月朔日服美合并時服二

相成と爲り

明和元年六月十八日由く洋傳

張馬代と爲り

明和二年三月朔日河使美合并時服二
相成と爲り

明和二年六月朔日奉て洋場
飛馬代と執る。

明和四年四月朔日奉て洋場
飛馬代と執る。

明和五年七月朔日奉て洋場
飛馬代と執る。

明和六年四月朔日奉て洋場
飛馬代と執る。

明和七年六月朔日奉て洋場
飛馬代と執る。

明和七年六月七日
同辛三月廿六日

天明二年七月八日
天明二年七月八日

天明二年七月八日

天明二年七月八日

天明二年七月八日

天明二年七月八日

天明二年七月八日

天明二年七月八日

天明二年七月八日

天明二年七月八日

天明二年七月八日

天明二年七月八日

天明二年七月八日

同年八月十日公事方として替作とあり
同年同月十日中退福の多用とあり
時服とあり

天明七年七月十日

慶長七代の家老と補とあり

寛政七年九月十日沖陰奉り

寛政七年七月十日平八十二奉

延享二五年四月十日

延享元年四月十日

山書院南清津出城守廻十二日 日根野門助弘豊

改長年

日根野左門助弘豊
山書院廻長年八月十日

同年秋踏城の宿とあり

踏城とあり

天明七年六月十日

させり小形大右衛門とあり

踏城の宿とあり

同の年七月十日

踏城とあり

安永三年九月朔日 延書院番組次

同年三月廿一日 布衣志と名をよむ

安永六年九月朔日 延書院の延書院

安永六年九月朔日 延書院の延書院

安永七年十月廿一日 延書院の延書院

延書院の延書院

延書院の延書院

延書院の延書院

延書二年四月廿日

延書二年三月廿日

延書二年三月廿日

延書二年三月廿日

延書院番組次 延書院番組次 延書院番組次

延書院番組次

延書院番組次

延書院番組次

延書院番組次

延書院番組次

延書院番組次

延書院番組次

宝曆三年正月十日
河内三河陽明
同奉三月十日
時中

同奉秋路城の
村式

宝曆七年四月
時辰

宝曆七年四月
宝曆七年四月

宝曆三年正月廿五日

寛延二年正月廿五日

御書院番室
御書院印記
三巻
高禰

寛延二年二月
川口

宝曆元年
随つ

同奉十月
宝曆二年
御書院番室

百三十七年 美合 故と云ふ

宝曆十三年 八月十八日 晴と云ふ 百三十八年 陽の
時を世に伝ふと云ふ 明の十九日 言中にて云ふ
老相と云ふ

同 年 十月 日 陰 村 陽 後 有 明 日 言 中 に
百三十九年 美合 故と云ふ

宝曆十三年 二月 十日 申 卯 日 言 中 に 傷
か け 神 事 流 福 馬 の 村 へ 到 り 世 日 の 水 下 へ
朽 葉 多 量 して 事 事 と 勢 勢 日 言 中 に
百四十一年 美合 故と云ふ

同 年 月 日 陰 村 陽 後 有 明 日 言 中 に
百四十二年 美合 故と云ふ

明和元年 十月 十日 日 陰 村 陽 後 有 明 日
言 中 に 百四十二年 美合 故と云ふ

明和二年 十月 十日 日 陰 村 陽 後 有 明 日
言 中 に 百四十二年 美合 故と云ふ

明和三年 十月 十日 日 陰 村 陽 後 有 明 日
言 中 に 百四十二年 美合 故と云ふ

明和四年 十月 十日 日 陰 村 陽 後 有 明 日
言 中 に 百四十二年 美合 故と云ふ

同 六 年 十月 十日 日 陰 村 陽 後 有 明 日
言 中 に 百四十二年 美合 故と云ふ

同 七 年 十月 十日 日 陰 村 陽 後 有 明 日
言 中 に 百四十二年 美合 故と云ふ

寛政三年六月二日卯よりて寺社御後首
口年七月六日珍村御後首て明の七日官中に
百五十一番令致と候

寛政七年六月廿八日申人取

口年七月十七日布衣志と云々

寛和元年七月十日御先施取

文化九年七月九日西條の御後奉行

寛延三年十二月廿日

御書院番室賀下總守組

信房 武田 右衛門 左衛門 信房

後首等

宝曆二年三月九日珍村御後首て御後
揚

口年日月吉吉又心事御後首て明の廿日
官中に百五十一番令致と候

宝曆三年七月三日珍村御後首て明の
二百五十一番令致と候

宝曆四年七月三日珍村御後首て明の

同日菅中八百五十七日菅中八百五十七日

宝曆六年二月二日又於事涉後有

明の三日菅中八百五十七日菅中八百五十七日

宝曆七年八月五日於事涉後有

同日菅中八百五十七日

宝曆八年九月六日又於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

同日菅中八百五十七日於事涉後有

明和四十年四月十日より備前村に遷り
所居と揚明の音書中に記されてあると云ふ
同年十月十八日跡村湯後育の音書中に
百三十七番とあると云ふ

明和七十年三月廿日大崎湯後の村に到りて
所居と云ふ

同年中同月廿三日湯後育の村に到りて
所居と云ふ

同年七月廿日跡村湯後育の音書中に
音書中に記されてあると云ふ

明和八年三月廿日跡村湯後育の音書
中に記されてあると云ふ

安永元年十月九日湯後育の村に到りて
所居と云ふ

安永二年十月十日跡村湯後育の音書
中に記されてあると云ふ

安永三年十月十日又跡村湯後育の音書
中に記されてあると云ふ

安永四年二月六日湯後育の音書中に
流福の村の世帯と記されてあると云ふ

天明二年六月晦日死す

寛延三年三月廿日

御書院書室賀下徳守組

御書院書室賀下徳守組 三條 鈴木八郎政方

法吉右衛門三條 後生助

宝曆三年秋諸侯の番書あり来り

古友諸侯の番書あり来り

明和元年三月廿日御書院書室賀下

三條信三郎

天明三年三月廿日御書院書室賀下

同年九月御書院書室賀下

御書院書室賀下

天正六年三月三日
かきこへ侍御下りて

天正六年三月十日
實政元年三月七日死す

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

實政元年三月廿日

河津河部周房の御平命長原忠房

河津河部周房の御平命長原忠房

實政元年三月廿日 祥年俸上納

長原忠房の嗣子として病ひをなけて

なり

實政八年三月廿日 祥年俸上納
河津河部周房の御平命長原忠房
河津河部周房の御平命長原忠房の御平命長原忠房
河津河部周房の御平命長原忠房の御平命長原忠房

その後中江に渡り、以後は
武士の世にあり、その
重なる追放の事なきに
後亦有元等付入る。

宝曆二年九月十日

宝曆元年六月二日

左派有利無利

山崎信田鐵田等布衣

御書院番室賀久徳守徳 云々名 世及之有利育

改左派也

宝曆三年秋、踏城もあつて、

まよふる為く、あつて、

明和八年二月五日

日辛八月十三日死

宝曆二申年九月十日

延喜二十二年八月二日

治田吉成

中書省御内侍

御書院番室賀正総年組吉成 治田吉成 吉成利久

改三年

宝曆二乙酉年秋洛陽の吉成

宝曆六乙酉年九月十日

同日板倉佐渡守勝清相良の御書院
中書省御内侍吉成利久
御書院番室賀正総年組吉成
御書院番室賀正総年組吉成

宝曆八乙酉年九月十日

新吉原の傾城町にありてをよめり
妹とよめり飯一事なりよめり
原が神尾長徳市と申合傾城町乃抱乃
抱女とてふふりし出てを志徳市
方口忠と申重揚名町長徳代又六
云者抱女抱女一の候そより一談格友
日記と願出に依て日記お尋しに
そより思ひてま事お尋し陣
そ后又六中ありといさう遠くあり
又六中中とそ小金と贈りてなま中と
後日記とてお尋しありとせそ
約と遠く入るとそ中そと胸自由

仕送と願友お助口頼りて五人合代
借使とせしとそつとの言のふり
飯者と歳とそとそと事
悉く神尾市の慶のふりて
を請ふ慶とそとの言神尾抱女
傳へしに依てそ抱女とてそと絶

安永八重二年六月十四日大坂御留守御
命を以て七月廿八日御服美衣令と爲り明
五年三月廿八日亥六時四月朔日洋陽
天明七年七月廿三日

仙洞寺新時

口年九月朔日御服美衣令御服美衣令
御地とのりして十月廿日

院衆せしに叙身作せしに園東中にて
十月朔日かこきまきして佐後守と後
云明六年八月朔日宮東より御しを
あふ御馬日記

院の傳 奏しそりし

天明八甲年正月海曾都中系建仁寺乃
市中より大起して風烈はまき
仙院宿りしを白川照高院に
仙洞 遷幸せし時より影まきと誓ひし
多とまき所とのうせりし雲田は普蓮院
の言は候

御所は作か日二月廿日御所は候
まき

寛政二年正月廿三日

仙洞候の御所より新造の
御所よりしを御所は候

寛政三年正月廿三日

張三代之執て浮揚しその後部は
多くんとて一に宿いりてん

寛文三年八月廿四日群衆会

寛文四年七月廿五日群衆の忠告

東二重町の邦おちりて

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

宝曆二申年九月十日

寛文三年三月二日

十一年忠告の忠告

忠告信但横山内記

御書院番室賀丸徳年恒 子名 内及左門忠方

宝曆三年申年忠告の農民の訴揚おちりて
公裁を祈り時その従志心守野を常備し
いふ者左門之曾にて在り内いふふ三箇の
兼地は存この申年定志知りや守と六つ入
りもあつて農民の事と談せし事
公法おちりのよと奉行不訴也
事より忠告明りりて

同年二月廿八日松平定信が備前守頼朝の
師に召されて忠告事二箇を乞ふ一曰父上を
忠如く中に任せて存じのお事二曰の忠告は
あるが農民の事と後一を事ひ及ぶの後は
御出でしつゝも時々の御出でしつゝ
事あるに深く外はなほなほ御出でしつゝ
世後を定むると尋らるゝ時を事ひ
より陳謝し二夜に夜尋らるゝを
陳すゝふ詞あり一忠告はひそくに父上
中に召せ給へ事お遠めしつゝも
中事不肖の事し作有て過害を
及ぼしつゝは作有し事お月かして免され

同年十月に至り陸奥の警備あり
宝曆七年十月廿三日青山中一人の郎
郎親史ありし
宝曆七年秋又陸奥の警備あり
宝曆十三年六月廿日又青山中一人の郎
郎親史ありし

明和七年秋又陸奥に入つて警備あり

安永三年九月五日死す

宝曆二年辛卯九月十日

宝曆元年辛卯十月廿日晦

左八郎良徳忠房

小菅右衛門守重守

御書院番室賀下總守組七喜右衛門長之
改二喜右衛門

宝曆三年秋陸奥の郡藩あり

増設破快奉約と誓む内の子年九月

二十日病ひに依り諸藩より同日に自決す

宝曆四年辛卯九月九日死四十六歳

宝曆二申年九月十日

延享四年六月十日

於母信昌忠成

山崎信田申出御守死

山崎院書室賀力徳守田吉右 飯河信忠馬也信

宝曆二酉年秋月十二日 幸秋路城

宿舎にむす夜毎の白根村に落ち

明和二年十月晦日 穉入書本平田而主死

明和七年六月三日 死年七果

宝曆二申年九月十日

宝曆元年六月二日

中書省

中書省

中書省

改

明和六年六月十日

安永六年三月十日

宝曆二年壬午九月十日

寛延三年辛未三月五日

左派大言要書

中書後廻河勝左第上死

御書院書室賀下總守領三原島山第の南林

宝曆十三年壬午七月十日

河内日吉二日百三十七日

明和七年壬午三月九日

死

九月十日百高不出使

宝曆二申年十月廿三日

宝曆元年辛丑月廿四日

若一而政音書多

小宮法祖甲申出祖守之死

御書院苗室賀下總守祖之墓 大河内守而政品

宝曆二乙年四月廿六日死于乙未

宝曆三年八月四日

宝曆三年八月九日奉旨

菅原内膳忠成

中務卿内膳忠成

近衛院前中務卿内膳忠成

改

宝曆三年九月朔日

近衛院前中務卿内膳忠成

近衛院前中務卿内膳忠成

近衛院前中務卿内膳忠成

宝曆三年七月某日

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

宝曆三年六月四日

宝曆三年三月廿六日

教員秀合

小寺信雄

河村主殿

改

宝曆三年六月廿六日

昭和三年八月廿日

宝永八年六月廿日

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

宝曆二年三月四日

一海軍

寶曆三年九月二日

勅旨流末等忠臣

御書院書室如左總守道三條 版高源之帝胤雄

安永九年三月三日 釋入清田澤山寺死

天明元年八月四日 致仕

天明四年四月九日 死 享年七十一

宝曆三酉年二月廿日

宝曆二甲申年二月廿日

免寺南信女養子

此書信但信田之信而之配

御書院番室如天下

總字

川原若南信見

後之集

宝曆十辰年二月十日

明和三年二月十日

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

宝曆二年六月四日

延喜二十三年七月二日

貴志河原高教書

小倉信祖前井内院

行書院書室賀下總守

書

貴志河原高教書

改封

日事秋造候の書

宝曆二年秋造候の書

宝曆十二年正月十日小松川の書

道達一多少何事封後四月十日書

石

明和二年秋造候の書

安永六年九月晦日移入石河古依

天明三年十月八日死

宝曆三年六月廿日

寛延三年三月三日

清之帝

小岩

御書院書室賀下徳守組 三原村清孝

改清之帝

宝曆四年三月

宝曆九年

宝曆三年一月四日

宝曆三年十二月四日

主殿内智子氏

上卷信但田中出祖守子氏

御書院者宝賀公下徳守也

三石

坂井談之而成紀

内子依

後述馬

曰年秋宝曆三年秋諸城の宿願あり

明和元年十一月廿六日移入松平志麻呂守子氏

天明元年十一月廿六日免子子古兼

宝曆六年六月十日

寛保九年三月廿日

世宗而定者愚凡

小宗信祖松平頼母之死

御書院苗村本和泉守道 千代若 寺田大台而定賢

改公家也

同奉十月九日進物書

宝曆七年六月廿日

大御所様前二日 堯而仍六 御福位

御院號御用云々々々 宗親上 皇親の作代

弟 今如と編了 早き御少く 弟部は

あつて御用と替り七月六日御

宝曆十二年六月十日御信書

曰年八月二日治序に由りて之の
作行し曰月十日治序に由りて之の
後了上月十日治序に由りて之の

曰年三月十日治序に由りて之の

曰年元在年三月十日治序に由りて之の

曰年四月十日治序に由りて之の

作と云ふ

曰年八月十日治序に由りて之の

曰年三月十日治序に由りて之の

寛政二年三月十日治序に由りて之の

宝曆七年六月十日

寛政八年四月十日

寛政九年三月十日

御書院書札本和采守徳 千喜若 桂村吉次郎而之方

改元在案

宝曆七年九月十日

宝曆六年十一月十日

宝曆六年十一月十日

森若山守信

守信

御書院番杉本和泉守信 二言字右 小林合之而之守房

守信

改若山

同日書の内守信と云ふ所の作り

宝曆十年十一月九日死す

宝曆六年二月十日

宝曆六年二月十日

三子布志廣忠

小書信組天川寺住持

御書院南村和采守廻 九景 大之保次所古忠休

改三子布

宝曆七年九月朔日

御服白紙封と楊子明の手辛秋云云

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

宝曆六年六月十日

宝曆六年六月七日教督

又助息信助

山崎信助内膳之死

守書院南村本和泉守但 喜右之津見主水貞満

宝曆七年三月武藏國の国乃事地

今年水災よりハ今更々成り給ふ

宝曆七年秋諸城の形を傳へあり明の

手年福いあり

宝曆十二年八月廿八日陸路城死田千九家

宝曆六年六月十日

宝曆六年六月十日

御書院番村本和泉守道

水野市へ水野義

改教

水野市祝勝美熱爪

水野市祝勝美熱爪

明和二年九月和智本殿山へ神幸

流福の村へ和智の山へ神幸

美合に和智

明和二年九月和智本殿の村へ

和智に和智

明和二年九月和智本殿の村へ

和智に和智

明和四年十月十六日
明和四年十月十六日
列々、瑞和に記す

明和五年秋、瑞和の
列々、瑞和に記す

寛政八年八月八日
日辛九月朔日
寛政八年八月八日
日辛九月朔日

宝曆六年六月十日

御書院書院和泉守
御書院書院和泉守

改修部

宝曆八年二月十日
列々、恩賜あり
美令改と記す

宝曆九年四月十日
宝曆十年秋、瑞和の
宝曆十一年秋、瑞和の

之くは 隆徳日多く 隆徳中

明和六年秋 安永五年秋 天明元年秋

隆徳日多く 隆徳中

寛政三年三月廿九日 祥入法師 佐渡守 文死

寛政九年七月廿九日 致仕

日年 十月廿九日 死 享年八十一

宝曆六年二月十日

元文二年二月廿九日 曾

曾月改清老成

山部信但 治田 彦吉 死

御書院 善行 本和 永守 但 三信 柳 永吉 為 帝 改 芳

改 芳 爲 帝

宝曆六年十月十二日 死 享年八十一

六月十日百病不効

宝曆六年七月廿三日

宝曆四年九月廿日

在二膳元

山菅信祖

御書院南村和泉守 二景 桜井百助勝部

改元八節

強城の者並に未事守妻取人あり

明和二年八月廿日

自火焚く

寛政五年七月廿日

六月十日百病不出候

宝曆六年八月廿六日

寛延三年辛丑三月廿四日

徳義儀陰養子

小菅屋廻松平松母之宛

御書院南村本和泉守通 吉右 小濱 徳義儀自隆

宝曆七年秋落城より寄書

明和元年三月廿八日法儀等に候て

多利及五日百病不出候

此書三月廿六日大崎藩の村に到りて

時辰に候

明和三年秋人の代りて落城より

寄り又明和五年辛丑寄書より落城の

聖徳太子の事

明和八年二月五日大内宿禰の村に
列々時辰ニシテ

安永三年秋人の傳りて

安永三年秋人の傳りて

聖徳太子の事

天明二年十一月廿一日

宝曆十二年六月晦

宝曆九年辛酉八月晦

修徳貞徳

山内重隆

河内守藤原経成

後

日辛九月

一

明和七年二月晦

天明元年正月

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

宝曆十二年二月晦

宝曆十二年正月廿一日

所書院南福業紀任守但 名 瀬名内作義心

瀬名内作義心 義心 瀬名内作義心

旧年秋落葉の事あり

明和六年九月朔日落葉の事あり

法眼白根好と云ふ明の事あり

ゆき洋福子

安永元年七月十八日死す

宝曆二年六月晦

宝曆二年七月三日

長安市橋本町

山崎信通之田中帝之丞

御書院書福業紀任守也

音字

書本富之助光廣

改云書院

明和二年十二月六日高島郡下道達書

村多利及口月九日管中仁京之代服

三上信子

明和二年十月晦日祥入福之布之丞

明和二年九月七日高島郡下道達書

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

宝曆二年二月晦

宝曆八年七月三日

清玄又盈好惠

山崎信恒因之脂と死

行書院南福業紀伊守恒 景康 松林清九而盈則

同幸秋路城の影を懐く

明和二年二月廿六日之福清院の村に

列して時辰を待て

明和四年十月廿九日死す

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

宝曆十二年六月晦

宝曆十三年二月九日祭

市南書房

山本信但松平左衛門

御書院書福業紀任守

三

大久保友次郎

後宮

宝曆十二年六月十六日拜入設樂寺十帝上祀

明和六年二月九日西御中惟但松平左衛門

宝曆十一年六月晦

宝曆十一年六月晦

山書院南福集紀任守組 二言儀 任素十言而忠高

後 又
嘉永
又

同日誓の因百儀と是の作首

同辛九月朔日發着其書山紙のそく

白紙封と終り明の辛辛十月十日

の事と 台紙と

明和元年三月廿一日大御所後継の封に
列りしれども封終りて恩賜のたむ所は
同辛十月十日唯若改て右の物とす

明和二年二月廿七日大船渡後の村に
列々時服ニシテ

明和二年九月朔日政府より
列々時服ニシテ

明和八年十月三日市川の
道達志多村長月十八日
時服ニシテ

安永元年二月五日同業の
麻布市街所の位
同業九月十日臨時校の
安永元年二月五日同業の

安永元年二月廿六日大船渡後の
列々時服ニシテ
安永元年九月朔日臨時校の
安永元年十月十日臨時校の
安永元年十月十日臨時校の

安永元年十月十日臨時校の
安永元年十月十日臨時校の
安永元年十月十日臨時校の
安永元年十月十日臨時校の
安永元年十月十日臨時校の

天明二箇年十月廿日大内侍後首より
可成に云々

天明二箇年九月朔日強城の事云々
限付と揚る又同日の事と云々
十月朔の事云々

御代の事云々

右記と云々

寛政四年二月十二日御代官

同日の事云々
右記と云々
同日の事云々
同日の事云々

校書と云々

寛政七年二月十二日御代官
一万余と云々

同日の事云々
同日の事云々

寛政九年二月十二日御代官
同日の事云々

六月晦日百福不出使

宝曆十三年七月廿日

宝曆七年九月廿日

御書院書指葉記存御 三音石内及葉之御改帳

之也改帳之甲也

中書信但田中出御之也

日辛卯秋洛依の影書信あり

明和六年秋又洛陽にありてあり

安永元年十月廿九日大洛陽にあり

列して時脈にあり

安永七年十月廿二日移入永井監物に宛

天明六年二月廿日岩河の御内所

指ヶ谷所々の出書ありてあり

天明三年七月廿六日致仕

宝曆十三年七月十八日

寛延元年七月廿一日

丹下誠賢忠从

山崎信綱古坂大守之丞

所書院書福業紀行守組

二子

本多右次郎寛方

改丹下

明和六年九月朔日謹識帝位の御服

白根組と云ふ御被奉行と誓り明の

寛永十年十月廿一日御より六 台敷と云ふ事

寛永六年九月朔日又謹識の御服白根

組と云ふ御事と云明の御事十月

十日御より 台敷と云ふ事

天明三年四月十日御使中表

同年十二月十八日布衣死と云ふは

天明六年八月廿七日葬高倉

天明八年十月廿七日致仕

寛政二年十月廿三日誓つゝして後奉

つゝと云

寛政九年十月廿七日葬高倉

死と云ふは陽治の事と云ふ

同年六月廿六日死す七歳

宝暦十二年七月十八日

宝暦十四年十月廿日

邦部信綱の事

邦部信綱の事

邦部信綱の事

明和二年十月廿日

の邦部信綱の事

明和五年秋

邦部信綱の事

安永元年二月廿日

邦部信綱の事

安永二年六月廿日

宝曆十二年七月廿八日

宝曆十二年十月廿二日

御書院番稻葉元守組 左 右 系極仔藏高昂

改左系

明和二年三月十二日

宝曆十二年七月十八日

宝曆十二年七月晦日 茶屋

次弟之儀並に後養子

出立之儀並にその方の御事

御書院 苗福 兼 仁 存 年 恒 子 右 大 忌 言 力 也 賢 人
改 修 之 助

明和六年秋 踏成り多し 御書院

かゝるに 御書院 波と勢めて 江戸 示 止 也

明和八年 辛酉 正月 立 月 麻布 永 恒 之 郎

御書院 示 止 也 又 永 永 元 存 年 二 月 五 日

同日 是の 大 忌 言 力 也 賢 人 御書院 示 止 也

今 御書院 示 止 也

安永二年七月十六日 死 三年 八 某 某

宝曆十三年七月八日

宝曆十三年六月三日

源吉定高書成

中書信通中書信通中書信通

中書院南橋葉紀仔守通子右

松平親貞定因

改印書

明和六年秋諸城の古印書

明和八年七月四日

宝曆十二年七月八日

宝曆十二年二月三日

播磨守能治書

崇徳院上皇御成中

御書院南福乘紀序組 于右 別不海在馬自叙

明和四年二月五日

命之七月廿八日

三年三月廿八日

安永八年四月五日

同年三月十六日

天明三年六月五日

命之七月廿八日

明の存年四月相傳て洋傳寺
實政院に子年二月廿二日消先施院
同年七月廿五日書二書所の邦麻の
大更あつく悉く焼失ゆきてその門
戸ハ海りぬ
實政院に子年二月廿七日死す云々

宝曆十三年七月十八日

檀越為主能書所
書信細書未承該中云々
五劫
寺書院書福業記仔年絶
書名 坪内檀越書所主縁

明和七年三月晦日移入設樂若原寺に死

書承を在年分書西
城山檀越書所書承を細入

宝曆十二年七月八日

宝曆十二年七月八日

東市公館

書院

書院南福業紀任守地音名奥村内為元能永

昭和二年七月五日

昭和二年七月五日

昭和二年七月五日

昭和二年七月五日

昭和二年七月五日

昭和二年七月五日

昭和二年七月五日

明和六年四月廿日免二年之累

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

宝曆十二年七月廿日

宝曆十二年三月辛酉日

今七帝職利書子

少帝後但後常言在馬と死

御書院苗福業紀任守領 高名 柳原為十帝職永

改在馬

明和六年秋書永六年秋五帝之已年

秋落候の宿意の事

寛政七年三月廿日死守二年

宝曆十三年七月十八日

宝曆十三年六月九日初智

御守忠孝書

山崎信恒松平左衛門

御書院書福業紀任守恒 彦右 逸見寛三 御書信

改 彦右 彦右

明和二年三月十五日法ら橋路の村に到て

御書に云く時胎と云く内の子百五にて

主人を怒と云く

明和二年三月廿一日大崎橋路の村に

到て時胎と云く

明和二年四月十五日法ら橋路の村に到て

時胎と云く福明の子百五にて主人を怒と云く

明和八年四月五日又清ら橋原の村に列て
時胎を後明の十日宮中に生じて其母は湯
也永六の年六月九日移入山宮系を生まるる

寛政元年八月九日おき死の世位は扱
勢の並ぶるまきり右河守守自及
傳へる

宝曆十二年七月十八日

宝曆十二年七月二日

志高忠

山宮系但帝橋大膳と死

御書院苗裔系紀伝音若林系右河守忠英

明和六年秋遊城の常世の事

也永四の年秋百人の遊城の事

御書院

也永六の年秋遊城の事

三明二宮の年秋為取人遊城の事

天明の年秋遊城の事

寛政元年八月九日御書院苗裔

同年七月十六日布衣志と名をす

寛政四年七月廿日麻布のたをりて

裏田舎の郵船大ふりて

同年九月三日裏田舎の郵船用成

よりて郵船裏田舎の郵船と

来りて引料金すりて且其の金すり

と名をす

寛政七年七月廿日麻布志と名をす

相馬の郵船と名をす

ゆきハ波波と名をす

名をす

同年七月廿日麻布と名をす

七月六日百病不出使

宝曆十三庚申七月廿日

宝曆十三年十月廿日

近書院書福業紀任守祖松村為流而養賴

改平在龜

明和二年四月七日先代つちとく

出りし書院の方の才三房りしと書院に

手事ととやうとくしうは手事ととあ

流ひし出仕と止むき作りし五月

十七日先とく

明和七年三月廿日移入初尾若狭守と死

實に致える年同二月十九日相と死の世作

五板之移しきより一紙申す定信相伝
何の上も此之税信在傳へり

寛政二年九月八日小菅信徳之死
寛政三年二月二日小菅信徳之死
一人の職をわたりて小菅信徳の
由此之税を死より月並りるの如仕
まへと傳へり

寛政五年七月十日死す六条

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

七月十八日百病の出使

宝曆十二年八月六日

延喜元年二月十日

永田吉成信憲嫡孫兼祖
小菅信徳川口孫也
改吉成
延喜元年
書院書翰兼紀行守祖 吉成 永田右馬也清行

陸奥の移しきより一紙申す定信相伝
寛政六年八月十日死す六条
寛政六年九月十日死す六条
信和と伝へり

宝曆十三年三月十八日

御書院書翰系記存御

三原 坂部 主税 廣高

西河内住御書院主事御三原市廣保書子

改 十番屋馬

徳中守
山崎守

明和元年三月十七日臨村御後首之明乃

大目當中(一)之旨(一)其令(一)之旨(一)

明和二年三月廿日大御御後乃村(一)

列(一)時股(一)之旨(一)

同和三月二日臨村御後首之御物(一)之旨(一)

明和三年三月廿日田御御後首(一)之旨(一)

御物(一)之旨(一)

曰辛十月廿日該村中後首て湯和死と云々
曰辛十月廿七日中川のまうに道邊志事村
多利殿十月二日當中にまうて時腹三と云々

明和二年七月朔野馬と云々

曰辛十月廿四日と云々

明和二年四月十日より備前村に到り

時腹三と云々

曰辛十月廿日該村中後首て咽乃十日

當中にまうてと云々

明和二年四月廿七日該村中後首て

湯和死と云々

曰辛十月廿日該村中後首て湯和死と云々

沙用と云々

明和七年三月廿日備前村に到り

曰辛三月朔日野馬と云々

明和八年二月廿日備前村に到り

曰辛十月廿日備前村中後首て湯和死と云々

安永元年四月廿日備前村中後首て湯和死と云々

曰辛十月廿日備前村中後首て湯和死と云々

安永二年四月十日より備前村に到り

時腹三と云々

曰辛十月廿日備前村中後首て湯和死と云々

安永三年九月廿日該村中後首て湯和死と云々

安永四年二月廿日安永中辛二月十六日

大崎浦の村に到りて時辰三と爲り

安永六年三月廿八日瑞村浦迄有る
陽也と爲り

同年九月廿日大崎浦の村に到りて時辰三と爲り

同年十月十日瑞村浦迄有る
明の十二日
言中に百と爲りて其令と爲り

安永七年十一月十日浦より高船乃村に
到りて時辰三と爲り
明の十二日言中
百と爲りて其令と爲り

安永八年十一月十日浦より高船乃村に
到りて時辰三と爲り

安永九年十一月十日浦より高船の村に到りて

大崎浦の村に到りて時辰三と爲り

時辰三と爲りて其令と爲り

同年四月廿日大崎浦の村に到りて時辰三と爲り

天明二年四月廿日浦より高船の村に到りて

時辰三と爲りて其令と爲り

同年二月廿日大崎浦迄有る
陽也と爲り

同年四月廿日浦より高船迄有る
陽也と爲り

是よりして其令と爲り
小崎浦迄有る

陽也と爲り

天明三年二月廿日浦より高船の村に到りて

時辰三と爲りて其令と爲り

同年五月廿日浦より高船迄有る
陽也と爲り

是よりして其令と爲り

老と爲りて其令と爲り

天明八年四月五日清原村に列して
時辰三ノ揚ノ四ノ五日當中に至りて美奈村に
天明八年四月五日清原村に列して
時辰三ノ揚

天明七年三月五日清原村に列して
時辰三ノ揚ノ四ノ五日當中に至りて美奈村に
天明八年四月五日清原村に列して時辰三ノ揚
天明八年四月十日清原村に列して美奈村に
事無き時辰三ノ揚

天明八年三月五日清原村に列して
時辰三ノ揚ノ四ノ五日當中に至りて美奈村に

天明八年九月十日清原村

天明八年四月十日清原村

天明八年四月十日清原村の後の清原と
合りて

天明八年三月五日清原村に列して美奈村に

天明八年四月十日清原村の後の清原と

美奈村に列して

天明八年三月五日

蓮光院石塔寺式清原福の清原と合りて

天明八年四月十日清原村に列して美奈村に

天明八年四月十日清原村の後の清原と合りて

天明八年四月十日清原村の後の清原と合りて

天明八年四月十日清原村の後の清原と合りて

寛政十三年正月十八日大坂町奉行

同奉因前日吉見湯帳並全帳付届之儀

普叙算之儀も能申上致

寛政十三年六月十八日大坂町奉行

同奉日月帳目並全帳の同申上致

信成相付付しし御恩二百石九百石

寛政八年九月廿八日西丸御奉行

同奉十二月十日

若石の湯方は属上り也

寛政十三年七月廿七日山崎奉行

文化二年四月廿九日山崎信組

同奉 月 日 奉 申 上 致



